

洞窟と人類学・考古学

洞窟と人類学・考古学

洞窟はカルストを代表する地形の一つで、古くからさまざまな形で人類によって利用されてきました。一般に洞窟は地表に比べて安定した環境のため、古代の化石や地層が良く保存されています。人類学や考古学の分野では、洞窟に残された人類の痕跡から、過去の人々の生活や文化を明らかにすることが重要なテーマの一つとなっています。

洞窟と人類学・考古学の研究



陥没した木の根に開口する洞窟遺跡(徳之島・下原洞穴遺跡)。開口部が大きく、風雨をしのげる洞窟は、長期間に亘る人の利用の痕跡が認められるかも知れない。

発掘が進められている洞窟遺跡(沖縄県・サキタリ洞窟跡)。サキタリ洞窟跡では、旧石器時代の人骨や世界最古の釣針等が洞窟の中から発見されている。

洞窟は生活の場、水源、墓地、信仰の場、遊び場など、さまざまな目的で利用されてきました。ヨーロッパではネアンデルタール人(旧人)の時代以降、洞窟が活発に利用されていたことがわかっています。ホモ・サビエンス(クロマニヨン人:新人)の時代になると、フランスのラスコーのように芸術的な洞窟壁画なども残されるようになりました。

一方、日本は酸性の火山灰土壌に広く覆われており、旧石器時代の遺跡から見つかる人類の活動の痕跡は、石器や遺構(炉あとや落とし穴など)に限られています。しかしながら、石灰岩洞窟ではアルカリ性環境が維持されることから、人骨や獣骨、貝などが溶けることなく保存されるという特徴があります。

このようなことから、人類学・考古学者は洞窟や洞窟の堆積物に注目して調査を行っています。

日本の洞窟と人類学・古生物学

日本における洞窟遺跡は、岩陰も含めると740カ所ほどもあると言われていて、その多くは縄文時代以降のもですが、沖縄の石灰岩洞窟からは、後期旧石器時代(約3万5000~1万年前)に遡る人骨化石や遺物が数多く発見されています。このような人骨化石や遺物は、日本列島にいつどのような人類がたどり着いたかを知る上で重要です。洞窟の人類学・考古学調査は2000年代以降に再び注目されるようになり、多くの成果を生み出しています。

洞窟遺跡の調査(沖縄県・白保半根田原洞穴遺跡(国指定史跡))。天井部分が除去された洞窟の堆積物からは、多くの旧石器人骨化石が発見された。

